

『学び合い』を導入するに至った教師の変容に関する研究 — 『学び合い』初見から授業への導入後までの長期観察を通して—

教育実践高度化専攻
教育実践リーダーコース
福田 健

1. 問題の所在

文部科学省(2014)は、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」において、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある。」¹⁾と述べている。

西川(2015)は、アクティブ・ラーニングの手法の1つとして『学び合い』による授業を提案している²⁾。西川(2010)が提唱する『学び合い』とは、授業において、主体的・協働的に学ぶ学習集団づくりを目指す学習デザインの1つであり、学習者の相互関係を重視した学習である³⁾。『学び合い』による授業の有効性については多くのことが明らかになっているが、教師の変容に関する研究はまだあまり行われていない。

小林ら(2007)は、『学び合い』を実践した教師は、子ども同士のかかわりの中で、気になる子どもの学習に取り組む姿勢とその周囲の子どもたちの変容から『学び合い』の有効性を明らかにしている。また、『学び合い』実践者のみでなく、実践の対象となった学級の担任教師も同様のことを実感している⁴⁾と述べている。

谷内ら(2009)は、『学び合い』を導入した教師の変容を分析し、教師の役割を指導者から支援者と捉えるようになることを明らかにしている。また、『学び合い』が活性化するために「個」から「集団」を意識した発話へと変容する⁵⁾と述

べている。

しかし、『学び合い』を参観したことのなかった教師が授業に導入するまでの教師の変容についての研究はなされていない。

2. 研究の目的・方法

①研究の目的

本研究では、『学び合い』授業を初めて参観し、その後授業に導入するに至った教師について観察・分析し、意識面の変容を明らかにすることを目的とする。

②調査対象・期間

・N県公立小学校3・4年(複式学級11名)

担任 A教諭(教職歴18年)

平成27年10月～12月

・N県立高等学校1年(20名)

数学科担任 N教諭(教職歴28年)

数学科担任 I教諭(教職歴17年)

平成28年9月～12月

※調査対象者3名とも、調査開始時は『学び合い』による授業を参観したことがなかった、公立学校の教諭である。

③活動手続き

(1) 調査対象者が教科担任をする学級で『学び合い』による授業を『学び合い』実践者が行い、調査対象者が授業を参観する。

(2) 授業中の気づきを教師間で共有する。

(3) 授業後にリフレクションを行う。

④調査方法

(1) 『学び合い』授業時に、児童生徒と調査対象者、授業者にボイスレコーダーを装着し、発話を記録する。

(2) 授業前の打ち合わせ、授業後の振り返りにおいて、調査対象者と会話する際にボイスレコーダーを装着し、発話を記録する。

⑤分析方法

記録した会話をもとに、Posner (1982) の概念転換の諸条件⁹⁾をもとに発話を分類する。

3. 結果

分析結果から以下のことが明らかになった。

① 3名の調査対象者とも、Posner の概念転換の諸条件の全てのカテゴリーに該当する発話が見られた。このことから、調査対象者の3名とも概念転換つまり変容したことが明らかになった。以下は、N 教諭に見られた代表的な発話の事例である。(N: N 教諭, R: 調査者)

事例1 既存概念に対する不満に該当する発話

N: 講義やって8割できるようになる、残りの2割がどうしても救えなくてみんななやんでるんだから。

事例2 最低限理解できるに該当する発話

N: 『学び合い』の最大のテーマは全員ができるってのが、すっごくミソだと思う。

事例3 もっともらしいに該当する発話

N: あの、こっち側の子も、基本ロンリーなの。だけど、こうやって話してる。

R: 本当だ、関わろうとしてる。

N: ね、これはね、新しいと思う。

事例4 生産的であるに該当する発話

N: (前略) そしたら今度、K と何か絡むようになったりして。(中略)
これは絶対誰も寝ないからいいなあと思うのと、あとは、1年生を見てると最後までずっと数学やるじゃない。

② 調査対象者の発話を比較した結果、1) 子どもの変容から『学び合い』の有効性を実感している、2) 語りの重要性を実感している、3) 新たな課題や疑問を感じている、以上3点が共通点として見られた。

4. 結論と考察

調査対象者の3名とも概念転換が起こった、つまり変容したことが明らかになった。3名の共通点から、『学び合い』授業の参観後、『学び合い』を実践するように変容する教師は、子ども達の良い変容を実感し、授業内の語りの重要性を実感するといえる。つまり、上記を満たすアプローチをすることで『学び合い』授業を実践する教師が増加すると考えられる。

5. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省: 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」(諮問), 2014.
- 2) 西川純: 「すぐわかる! できる! アクティブ・ラーニング」, 16-31, 学陽書房, 2015.
- 3) 西川純: 『『学び合い』スタートブック』, 42-61, 学陽書房, 2010.
- 4) 小林千鶴, 西川純: 「子ども同士の『学び合い』を促す教師に関する研究」, 臨床教科教育学会誌, 7(1), 17-54, 2007.
- 5) 谷内香織, 西川純: 『『学び合い』授業における教師の変容に関する研究 - 『学び合い』導入からの長期観察を通して - 』, 臨床教科教育学会誌, 9(1), 85-96, 2009.
- 6) ウエスト, パインズ [編]; 野上智行 [ほか] 訳; 進藤公夫監訳: 「認知構造と概念転換」, Kenneth A. Strike and George J. Posner: 「概念転換として見た学習と理解」, 259-285, 東洋館出版社, 1994.

指導 西川 純